川端康成全集

第一卷

伊豆の踊子

新潮社

川端康成全集第一卷

伊豆の踊子

昭和四十四年五月二十五日　發行
昭和四十八年九月三十日　三刷

定價　千七百圓

著者　川端康成
發行者　佐藤亮一
印刷者　塚田重
印刷所　塚田印刷株式會社
原色版　半七寫眞工業株式會社
製本所　新宿・加藤製本所
東京都新宿區矢來町七一
發行所　株式會社　新潮社
電話東京(〇三)二六〇—一一一一
〒一六二　振替東京八〇八番

亂丁本、落丁本は本社又はお買求めの書店にてお取替へいたします。

© Yasunari Kawabata Printed in Japan 1969

第一卷　目次

十六歳の日記……七
招魂祭一景……四一
油……五七
葬式の名人……六七
篝火……七七
空に動く灯……九七

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

蛙往生……一一七
白い満月……一三三
青い海黒い海……一七五
伊豆の踊子……一九七
春景色……二二七
死者の書……二四七

文科大學挿話……二七三
死體紹介人……二九七
溫泉宿……三五五
狂つた一頁……四〇一

伊豆の踊子

十六歳の日記

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

——作者言ふ。括弧の中は二十七歳の時書き加へた説明です——。

五月四日

中學校から家へ歸つたのは五時半頃。門口の戸は訪問客を避けるためにしまつてゐる。祖父が唯一人寢てるのだから、人が來ては困る。《祖父は白内障で、そのころは盲目でした。》

「唯今。」と言つてみたが、答へる者もなく靜まり返つてゐる。寂しさと悲しさとを感じる。祖父の枕元の一間のところで、

「唯今。」

三尺に近づき、きつい調子で、

「今戻つて來た。」

耳へ五寸で、

「今戻つて來たんや。」

「おお、さうか。朝からししやつて貰はんので、うんうん言うて待つて、今また西向きに寢返りすんので、うんうん言うてたんや。西向かしてんか。な。おい。」

「ぐつと、からだを提げて——。」

「ああ、そんでええ。蒲團着せといて。」

「まだ具合惡い。もう一ぺん、な。」
「そんな《七字不明》。」
「ああ、まだ具合惡い、やり直して、ええ。」
「ああ、樂んなつた。ようしとくれた。お茶沸いてるか。後でまた、ししさしてんか。」
「まあ、待ちいな。そないに一ぺんに出來るもんか。」
「はあ、分つたはるけど言うとかんとな。」
暫くして、
「ぼんぼん、豐正ぼんぼん、おおい。」死人の口から出さうな勢ひのない聲だ。
「ししやつてんか。ししやつてんか。ええ。」
病床でじつと動きもせずに、かう唸つてゐるのだから、少々まごつく。
「どうするねや。」
「溲瓶持つて來て、ちんちんを入れてくれんのや。」
仕方がない、前を捲り、いやいやながら註文通りにしてやる。
「はいつたか。ええか。するで。大丈夫やな。」自分で自分の體の感じがないのか。
「ああ、ああ、痛た、いたたつたあ、いたたつた、あ、ああ。」おしつこをする時に痛むのである。苦しい息も絶えさうな聲と共に、しびんの底には谷川の清水の音。
「ああ、痛たたつた。」堪へられないやうな聲を聞きながら、私は涙ぐむ。
茶が沸いたので飲ませる。番茶。一々介抱して飲ませる。骨立つた顏、大方禿げた白髪の頭。わなわなと顫ふ骨と皮との手。ごくごくと一飲みごとに動く、鶴首の咽佛。茶三杯。
「ああ、おいし、おいし。」と舌鼓打つてゐられる。

「これで精氣を養ひまする。お前、ええ茶買うて來てくれたけど、あんまり飲んだら毒や言ふんで、番茶を飲んでるね。」

暫くして、

「津の江《祖父の妹の村》へ葉書出してくれたか。」

「はあ、今朝出した。」

「ああ、さうか。」

ああ、祖父は「あるもの」を自覺せられたのではないか。蟲の知らせではないか。《滅多に便りもしない妹に、一度來てくれといふ葉書を私に出させたのは、祖父が自分の死を豫知したのではあるまいかと、私は恐れたのでした。》——私は自分の眼がぼうつとなるまで、祖父の蒼白い顔をみつめてゐた。

——本を讀んでゐると、人の氣配がした。

「おみよか。」

「へえ。」

「どうやつた。」

急に大きい不安が胸に迫つて、私はテエブルから向き直つた。《その頃私は大きいテエブルを座敷に据ゑてゐたのです。またおみよといふのは、五十前後の百姓女です。毎日朝晩自分の家から通つて來て、煮焚きその他の用事をしてゐてくれました。》

「今日行つて、お年は七十五でかういふ理由で寢てられまして、もう三十日も、よく食べ物を上りますのみ、通じがおまへんので、一應伺うて下さいと言ひました。（お年がお年ですから、急なことはありますまいが、年病ですなあ。）と言うてやはりました。」

二人の胸から大きい溜息が出る。おみよは續けて言ふ。

「(食事のよく行けて、通じのないのは腹の中の毛物《獸》が食うてますのや。)と言うてやはりました。(今までよりはずつと食が進みませう。これまでよりは咽がよく通りませう。)とは言うたらしまへんけど、(その毛物は酒が好きです。)て。どうしたらよろしよまつしやろかと言ふと、(妙見樣のお卷物を病人にいただかして、部屋中を有難い線香でくすべなはれ。)て。——毛物が憑いてる言うたかて、時間を取り違へなはるくらゐで、別に變つたこともおまへんけどなあ。それでも、もとは鰹節一片でも咽にひつかかりましたのに、近頃は、おすもじ《すし》でもお結びでも一口にいけますし、ああ、あの一々ごくごくと言うて咽佛の動くのが氣に食ひまへん。稻荷さんが巫女に下らはる、あの時も、出やはる時もごくごくと咽佛が下りまつしやろ。それに、この前えらい酒飲みなはつたやろ。今日の占ひ、ほんまでつしやろか。」

「さあ。」

眞向から迷信と言ひ切つてしまふ勇氣もない。私は不思議な不安に襲はれて全く迷つてしまつた。

「それで家へ戻つて、五日市《村の名》へ見て貰ひにい《行》て來ました、と言ひましたら、(もう死ぬて言ははつたか。)と言ひなはるよつて、いいえ、急なことはないが、年病やと言うたはりました、禍ひやと言うたはりました、三十日も通じがないよつてに、一遍見てもろて來ましたと言うときました。」

「それから、戻つて來てじきに《直ぐに》、線香立ててくすべて、(昔から由緒正しいこの家には、そんな方《毛物のこと》がゐられない筈です。また、なんでわけもないのに人に害なさる。茶や飯が欲しければ、欲しいと仰しやつたら差し上げます。早速出て行きなさい、出て行きなさい。)と言ひました。道理づくで出して見よとおもて《思つて》な。明日から戌亥のすま《隅》に茶と飯と供へたらよ

ろし。魔除けに、倉の刀を一本出しといとくなはれんか。拔身にして寢間の下へ入れときまよ。それから、明日もう一遍お稻荷さんに伺つてみましよ。」

「どうも不思議やな。ほんまやろか。」

「さあ。ほんまでつしやろか。」

——祖父の枕元で。

「お祖父さん、小野原《村の名》の狩野いふ人から手紙が來てるけど、金いつど借つたんか。」

「ああ、借つた。」

「いつ。」

「七八年前。」

「さうか。」

また飛び出しやがつた。《と言ふのは、あちこちに拵へて置いた、祖父の借金が、その頃一つづつ私に見つかつて來たのです。》

「そんなん、わたえ適ひまへんで。」と、おみよ。《おみよにも金錢上の相談をしてゐたのです。》

——夕飯、祖父は海苔卷のすしを食べてゐられる。ああ、あれ、毛物が食べてるのやろか。それ、咽佛が動いた。現に人間の口へ這入つてるのに、馬鹿馬鹿。しかしもう私の頭には、「毛物が食べてゐるのだ。」といふ言葉が刻みつけられて離れぬ。倉から一劍を取り出し、寢床の上で打ち振り、蒲團の下に入れたのは、自分ながら後で可笑しい。しかし、おみよは大眞面目で、部屋の空氣を切り拂ふ私の恰好を見ながら、

「さう。さう。」と側から勢ひを附けた。若し人が見てゐたら、私は狂人になつたと、どんなに笑つたらう。

やがて暗くなつて、折々、

「おみよ、おみよ。」と呼ぶ細い聲が夜氣を顫はし、その度に祖父の用を足しに行くおみよの足音が、本を讀んでゐる私に聞えてゐた。そのうちに、おみよは歸つたらしい。私が祖父に茶を飲ます。

「うん、さうか、よし、よし、ぐうつと、うん、ぐうつと。」で、咽佛がごくごく動く。これ、毛物が飲んでゐるのか。馬鹿、馬鹿。そんな妙なことがあるものか。中學の三年生にもなつてゐて——。

「ああ、おいし。茶はよい。淡泊でよい。餘りおいし過ぎるものはいかん。ああ、おいし。——煙草は？」

ランプを顔すれすれに近寄せると、眼を少し開いて、

「なんや。」と言はれた。おお、もう再び開かれないのかしらんと思つてゐた眼が、この眼が開いた。一道の光明が暗黑の世界に射したやうに嬉しかつた。《祖父の盲目が治るだらうと思つたのではありません。その時祖父は瞼を閉ぢてゐたのでせう。そのまま死ぬのではないかと、私は不安だつたのでせう。》

——これまで書き續ける間には、いろんなことを考へた。さつき劍を振り廻したことなんどは可笑しくなつた。阿呆らしくなつた。しかし、「腹の中の毛物が飲食してゐるのだ。」といふ、この言葉は私の體ぢゆうにくつついてゐた。——今はかれこれ九時。「毛物が憑いてゐる。」そんなことはないといふ意識がいよいよはつきりし、腦は洗はれたやうだ。

——十時頃、おみよ祖父のおしつこをさせるために來る。

「寢返りしたいなあ。——今どつち向いてるのや。うん、さうか、東か。」

「よつこらしよ。」と、おみよ。

「ううん。」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com